



2018年6月16日発行

No.43

早稲田大学本庄高等学院通信

発行：早稲田大学本庄高等学院 発行人：吉田 茂 〒367-0032 埼玉県本庄市栗崎239-3 ☎0495-21-2400 【URL】 <https://www.waseda-honjo.jp>

図書館、「烈風」と石川三四郎

学院長 吉田 茂



前橋出身の萩原 朔太郎の「帰郷」という詩に出くわしたのが高校二年の時だ。それは「わが故郷に帰れる日 汽車は烈風の中を突き行けり。ひとり車窓に目醒むれば 汽笛は闇に吠え叫び 火焔ほのぼは平野を明るくせり。まだ上州の山は見えずや」と墨書され、薄暗い図書館の一角に扁額のごとき様で飾られていた。理系志望でありながらまったく物理がわからず苦悶する自意識過剰の私には、これに続く「過去は寂寥の谷に連なり 未来は絶望の岸に向かへり。砂礫のごとき人生かな」という詩句が身に染みた。それから四十五年余りが経ち、「絶望」すら感じるゆとりのない年齢になったが、今でも人影がまばらで、心の晴れぬ者にとっては居心地の良かった図書館のことをよく覚えている。

先日、市の図書館を訪ねた。昨年一月に改装オープンされたそれは非常に明るい空間で会話をしむことのできる「多世代交流室」まで設置され、使い勝手が良さそうである。石川三四郎資料室はその二階にあるが、入り口のドアは閉ざされ中は真っ暗の悲しい感じであった。この資料室を訪ねるのが今回の目的であるので、司書の方に声を掛けるとすぐに対応してくれ、ドアを開けてくださった。そして石川三四郎（二八七六～一九五六）はアナキスト（無政府主義者）としての側面が強調されるためか、地元の人あまり訪ねて来ないこと、小学校や中学校の社会科見学にもあまり利用されないこと、一方、イギリスからは「アーツ・アンド・クラフツ運動」で有名なウィリアム・モリス（一八三四～一九〇六）と親交のあったエドワード・カーペンター（一八四四～一九二九）の研究者が彼の書いた書簡を求めて来館することなどを丁寧に説明して下さった。

石川三四郎は今の本庄市山王堂生まれの社会運動家で、幸徳秋水（一八七二～一九一三）、大杉栄（一八八五～一九三三）と並ぶ日本のアナキストの一人である。幸徳は大逆事件により処刑され、大杉は関東大震災の

年、憲兵大尉甘粕正彦らによつて殺害された。ところが、石川は何度かの獄中生活や刊行した書籍や雑誌が発禁処分になる憂き目を見るが、戦後まで生きながらえた人物である。彼の思想の基盤は、「人間は幻影を食って生きている動物である。或いは幻影を讀み、或いはこれに耽溺し、或いはこれを恐怖し、或いはそのために闘争し、或いはそのために悲歎する。人間は幻影の奴隷である。」（中略）国家だの、政府だの、法律だの、宗教だのというものも、本来は人間の錯覚により、錯覚を利用し、更に錯覚を増強すべく成立したと存続する。」「幻影の美学」と自ら表現するところにある。

また、石川はしばしば「民衆を「土民」と称した。これは土を耕し生活する農民に加えて、額に汗して働く生産者をも含む総称であり、彼はこの「土民の生き方に強く憧れた。これは彼が八年にわたり放浪したヨーロッパでの生活、とりわけカーペンターやブリュッセル自由大学で地理学を教えるエリゼ・ルクリュ（一八三〇～一九〇五）と出会い、それらと共に農民としての生活を送ったという実体験に根ざしている。その後帰国した石川はいまの世田谷区千歳鳥山付近で「共学社」を立ち上げ農業生活を始める。よく知られる武者小路実篤の「新しき村」構想の後塵を拝した試みではあるが、石川のそれも「土民」として人間らしく生きようとする試みであった。この「共学社」構想は破綻するが、石川は太平洋戦争下にあつても転向することなく非戦論の立場を貫き、戦後も政府に迎合しない生き方を貫徹した。

彼の生まれた山王堂は利根川を隔てて上州伊勢崎に隣接する場所だ。冬、その利根川の河畔に立つ、朔太郎の詩に言う「烈風すなわち赤城おろしの冷たさに身を縮めざるを得ない。石川はその地で幼少年期を過ごした。彼の気骨ある生き方にこの「烈風」が何らかの影響を与えたのではないかと考えられる。

先日、大久保山学（本庄市周辺の文学の授業で石川三四郎を扱ったが、その名を知る者はなかった。だから、本庄市を知ってもらふ意味からも、六月には学院生とともに「石川三四郎資料室」を訪ねたいと思っている。

目標の大切さ、情熱と粘り強さ

保護者の会 会長 若旅 吉則



先日ある講演会で、ライザップの瀬戸社長のお話を伺う機会がありました。テレビCMでも有名な会社ですが、まだ39歳の若い社長です。その中で、こんなお話がありました。

「私は小さいころから勉強が出来ず、一念発起してなんとか大学に受かったもののバイト先の上司から『君は一般常識がない』と言われ、悔しい思いをしました。受験に必要な教科の丸暗記しかしなかったから、そう言われるのも仕方がないかもしれない。常識を身に付けるためにはどうすればいいか。そうだ、本を読もう、と思ったが、すぐ眠くなり全く本が読めない。どうしたら本が読めるようになるかを考えた末、とりあえず毎日日本屋に行くことにしました。毎日日本屋に行くことになる、なんとなく読んでみたいなと思える本と出合えるようになり、読む本を買ってきたのですが、読むと読むと眠くなる。仕方なく考えた末、本を開くことだけ毎日するようにしました。毎日開くと1行2行しか読めず、眠くなる時も多いのですが、だんだん1ページ2ページと読めるようになり、今では月に20冊の本を読んでいます。」

どうでしょう。なかなか月に20冊の本を読める人は少ないのでは。この方のすごいところは、自分がなりたいと思う状態を強く念じて目標を立てること、今の自分から出来ることからコツコツとやっていくこと、ステップを上げていきながら出来るようになるまでやり抜くこと、の3つではないでしょうか。

本学院の生徒は「高校入学」という大きな目標を掲げ、毎日コツコツと勉強し、結果としての合格を果たしました。見事にこの3つのステップをやってきている人たちがたくさんいます。そしてこの目標をすでに果たした今、生徒の皆さんの「今の目標」は何でしょうか。「いまス

ポーツをやっているので優勝を目指して毎日練習しているよ」という人もいれば「発表会があるので、そのための研究や資料作りをしています」という人もいます。中には「今の目標といわれるとちょっと…」という人もいます。もしも生徒の皆さんに限らず、大人でも難しいのは「与えられた目標」ではなく「自分で考えた目標」を作り出すこと、そして達成することかもしれません。さらにそれを繰り返していくこともかもしれません。先ほどの瀬戸社長も本が20冊読めるようになったからと言って、常識がついたからと言って、ライザップという会社を作れたわけではありません。一つの目標を達成したら「自分で」次の目標を定め、ステップを決めて、やり続ける。それが達成したら次の目標と繰り返す。それが本当に難しいことなのではないかな、と思います。

何も大きな事ばかりではありません。身近なことでもいいと思います。大切なことは、自分で目標を立て情熱と粘り強さを持ってやり遂げていくこと。そしてそれを繰り返していくことが、自分を成長させていく王道ではないのかな、と思います。

古代ギリシアの哲学者アリストテレスは2300年以上も前にこう言っています。

「人間は、目標を追い求める生き物だ。目標に向かい努力することによつてのみ、人生が意味あるものとなる。」

いつの時代も目標に向かって向上することが、人間としての大きな喜びの一つなのです。子どもたちにはこの学院で自らの目標を立て、努力し、達成していく練習を繰り返すことを学んでいてもらいたいものです。そして学院が掲げるスローガンのように、「自ら学び、自ら問う」人となり、校歌にあるように「大島国の大なる使命を担ひて立てる」人となつて、社会のどこかの分野で周りの人々に大きな喜びを与えられる人間に育って欲しいと思います。



「インク沼」という言葉をご存知ですか？「沼」とはネット用語で「はまる」「底なし」を意味します。万年筆のインクの色の魅力にとりつかれ、収集している人々が急増しています。私は学生時から万年筆が好きで、モンブラン149を2本持っていました。10年ほど前、一般的なブルーブラック以外の色が欲しかったのと、試験の採点用の赤色が欲しくて、銀座の伊東屋さんと相談したところ、Pilot（パイロット）の「Iroshizuka」を紹介されました。そのバリエーションと発色の良さに驚きました。このときは5色大人買いしましたが、その後「沼」に落ちることはありませんでした。

昨年12月、台湾台南の文具屋でSKBというアイドルグループの名前のような台湾メーカーの万年筆が展示されていました。スケルトンボディと真鍮のコーティングが面白くて2本、インクもSKBの赤系書系各2色を購入しました。インクの色とメカニズムが透けて見えるスケルトンの面白さにハマり、その後Pilotのスケルトンを1本、インクも東京に行く機会があれば伊東屋さんに寄り、色々なメーカーのものを買っています。「沼」にはまりつつあります。

「このデジタル時代に万年筆なんて：高価だし、インクは漏れるし」、多くの人はそう思うでしょう。「インク沼」現象を考えると、ふと思つたのです。「人間は、ある方向に進みすぎた時、その対極にあつたものの価値を再認識するのではないかな」と。そういえば、今のPilotの万年筆の人気の見るように自動巻き腕時計が復権しています。国際化が進んで、地元の良さが見直されるようになった、という話もよく耳にします。病気になるって初めて、健康の良さがわかります。自然環境が失われて初めて、種の重要性を再認識します。でも、このときは既に遅いのです。

「多様な価値を認識すること」、私達には、できるものならば、行き過ぎる前に、このことに気づきたいものです。（日本一トススルに詳しい情報科教員）



「近くて近い国」へ
地理歴史・公民科 羽田 真

二〇一七年度の一年間、特別研究期間の適用を受けて韓国・ソウルに招聘研究員として滞在した。受け入れ先となったのは、高麗(コリョ)大学の教育問題研究所というところだ。研究所の先生方はとても親切だったし、大学の外国人寄宿舎での生活も快適で、伸び伸びと過ごすことができた。高麗大は「韓国の早稲田」といわれ、延世(ヨンセ)大こちらは「韓国の慶應」と並ぶトップ私大に位置づけられる。スクールカラーはクリムゾンレッドで、学生の団結力が強く、パンカラな気風も早稲田と似ており馴染みやすかった。実際早稲田にとっても韓国初の協定校であり、北京大学と並んでキャンパス・アジアプログラムのパートナーにもなっている。高麗大で「早稲田から来た」と言えばどこでも手厚い歓待を受け、何でもスムーズに進めることができた。両大学の長年にわたる友好関係のおかげである。

もともと韓国の教育事情や教育内容に関心があり、それらについての調査を進めるつもりだったが、いざ行ってみるとむしろ日本の教育について調べる時間のほうが長かった。日本からやって来た教員ということで、最新の教育事情はどうなっているのか頻繁に尋ねられたからだ。韓国といえば厳しい受験競争で知られるが、教育制度や授業スタイル、学校文化は日本とよく似ている。先生方にとっても日本の教育は大きな関心事なのだ。また、韓国にはストディモイム(学習会)が盛んな文化があるのだが、日本の教育について文献で学ぶ集まりに参加してみると、「なぜ今アクティブ・ラーニングが注目されているのか?」「二〇二〇年度からの大学入試改革に現場はどう対応しようとしているのか?」など質問攻めにされた。仮にも日本代表としては適当なことを安易に答えるわけにもいかず、かなり勉強しなければならなかった。そして、滞在中は大学で行われる学会や研究会に足を運ぶだけでなく、ユネスコスクールの教職員交流会に参加したり、先生方の研修活動として実施されたフィールドワークに同行してディスカッションしたりもした。

清州の女子中学校に招かれ、一年生を相手に社会科学の授業をさせてもらったのはよい思い出になったし、ソウルの国際高校の先生とは二〇一八年度に年間を通じた共同授業を進めることを計画し、現在三年生の授業で実践が進行中である。SGHプログラムや修学旅行で来韓した学院生に会う機会もあった。組主任を務めた三十三期の卒業生も来てくれた。彼は学院の授業で交流した韓国の学生とも対面を果たし、一日を一緒に過ごしたそうである。

韓国は「近くて遠い国」といわれる。領土や歴史認識をめぐる対立がイメージにあるからだろう。私も「社会の教師として独島(トクト・竹島の韓国名)についてどう教えているのか?日本は歴史を歪曲しているのが許せない」と言われ、相互理解や問題解決への道のりの長さを実感したこともあった。しかし、両国間の往来者は年間五〇〇万人を超え、貿易面でも互いに依存関係にある。日韓W杯共催や「冬ソナ」を契機とする韓流ブームが到来してからも久しい。日本人メンバーが所属するKPOPグループTWICEのライブには何万ものファンが押し掛け、韓国で流行したファッションやヘアスタイルはすぐ日本の若い世代の注目を集める。新大久保には人気のチーズタッカルビ(鶏肉と野菜を甘辛く炒めてチーズを和えた料理)専門店が次々と出現し、フルーツピンス(かき氷などドリンクスタ映えする韓国デザート)有名店が進出すればたちまち行列となる。こうしてみると、韓国は「近くて近い国」になりつつあるのかもしれない。治安がよく、街中にあるカフェでは電源やWiFiが自由に使える、食堂の値段も安い。地下鉄やバスなどの公共交通が発達していて日本よりもずっと利便性が高い韓国は、外国人旅行者にも優しい国である。韓国人は世話好きが多いので、アンニョンハセヨ(こんにちは)とかカムサハムニダ(ありがとう)が通じます(だけでも覚えていけば心の通ったコミュニケーションを楽しめるだろう)。ぜひ多くの学院生に韓国を訪れ、韓国人と直接話をしてみてほしいと思う。多様な文化や異なる価値観に触れ、知的に成長するまたとない機会に恵まれるだろうし、そのような草の根の交流こそ、両国の国益と東アジアの安定につながる持続的なパートナーシップの基盤になるだろう。



スーパーグローバル ハイスクール(SGH)の取り組み

本学院のSGHは指定4年目を迎えました。過去3ヶ年の成果に基づき、各プロジェクトでの教育実践研究を深化させていきます。また11月の授業期間中に国際高校生学会WalSECを開催することで全生徒が参加できる「学びの国際交流」の一つの事例を提示し、志を共にするコミュニティに貢献すべく、生徒と教職員が力を合わせて取り組みを続けています。

本稿では2017年度後半の種々の「成果報告」、本学院のSGHの大きな特色であるSGHシニアスタッフ(生徒運営チーム)の活躍、およびWalSECの概要について報告します。(敬称略、学年は参加当時のもの)

◆ 学院外での研究交流会・成果報告会

□ 2017年度SGH全国高校生フォーラム (11月25日 文部科学省・筑波大学共催)

全国のSGH指定校(123校)とアソシエイト校(10校)の代表生徒が横浜パシフィコに集い、各校が取り組む研究課題のうちの1つをポスターセッションの形式で発表し交流を行った。本学院からは修学旅行の交流パートナーでもある安養外国語高校との学習交流の成果を高山実女(2年)・安本萌華(2年)・松沼花音(1年)・西村味佳(1年)が英語と日本語で発表。ポスターのタイトルは「Our Quest for "International Symbiosis" — A School-to-School Collaborative Study Program for Students from Korea and Japan—」(日韓高校生の学校間国際協働学習で探る「国際共生」への道)。参加生徒からは、「期末試験直前で大変だったが他者に聞いてもらえるのは貴重な体験だった」「学院内の取り組みの充実も、他校の研究テーマや研究方法に関心を持つことも、どちらも必要」との感想がきかれた。

□ Rits Super Global Forum 2017 (11月14日～18日 立命館高校主催)

立命館高校のSGH事業に招かれ市川実花(3年)・上野真琴(2年)・清水玲奈(2年)・伊藤璃杏(1年)・石上舞佳(1年)が参加。10カ国14校250名の高校生が同校に集い、17年度のテーマ“Education for Children —What education is needed for vulnerable children in the world?(子供の教育—危うい状況にある子供達が必要としている教育)”について約1週間英語で討論をした。参加者は「貧困」「通学困難な地域」「難民キャンプでの教育」など5つのサブテーマについてポスター発表を準備しフォーラムに臨んだ。参加生徒からは、「テーマについて徹底的に話し合うのは貴重な経験」「議論の前提条件が個人や学校ごとに異なり、話し合いの接点を見つけるのが大変だった」との感想がきかれた。

□ SGH甲子園 (3月24日 関西学院大学・大阪大学・大阪教育大学主催)

関西学院大学で開かれるSGH課題研究発表会の3部門に学院生が応募し、笠原栞奈(2年)・矢崎るみ(2年)チームは「英語口頭発表部門」の予選に合格して参加。またポスターセッションにはシンガポールの高校生とも意見交換をして進めている「若者が提案するインバウンド観光プラン」研究チーム(斎藤有紗(3年)・村瀬里緒(2年)・小川いぶき(2年)・松田梨沙(2年)・富木良(1年)が参加した。

◆ 学院内での成果報告会

□ 「附属校サミット 生徒発表の部」での成果報告 (11月18日)

全国の大学附属校・系属校の教職員約100名に参加していただいた教育研究集会の「生徒発表の部」で、SGHシニアスタッフを代表して遠藤竜仁(2年)・大畑璃子(1年)が「Pre-WalSECからWalSECへ—SGH

シニアスタッフの学びのリレー」という題で約10分の口頭発表を行った。また同日校内では各研究課題のポスターセッションも生徒が発表者となって実施。取り組んでいる内容や発表の仕方など、好意的なコメントを多くいただいた。

□ 2017年度SGH成果報告会 (1月31日 稲穂ホール、全1年生が参加)

SGHの各課題研究と2018年のWalSECの企画を1年生全員に知ってもらう目的で水曜午後に開催。各研究課題の成果の口頭発表とポスターセッションを実施。また、本学院在学中に科学の国際高校生フォーラムを経験した黒澤拓太郎さん(先進理工学部4年)、木村原貴さん(政治経済学部3年)をパネリストとして迎え、高校時代の経験が大学での生活やキャリアにどうつながっているかを熱をこめて語っていただいた。企画から当日の運営まで、一切をSGHシニアスタッフが担当。1年生からの事後レポートには、「自分ももっと関わりたい」「今は英語への苦手意識があっても大丈夫と励まされた」との感想が多くみられた。

□ 2017年度SGH事業「生徒レポート集」発行

夏季フィールドワーク参加者を中心とした各研究課題参加者、およびSGHシニアスタッフコアメンバーの労作が約150ページの「レポート集」にまとめ、全国のSGH校に送られた。

◆ SGHシニアスタッフの活躍

本学院SGH事業を運営し発展させているのがSGHシニアスタッフです。生徒自身の募集活動に応じて集まった有志メンバーで構成され、成果報告イベントの企画・広報・運営を担当しています。ユニークな点は、「任期」を半年ごととするので、メンバーが引き継ぎをしつつ柔軟に入れ替わって活動を続けていることです。本学院のSGH事業で提唱している「マイクロプロジェクトで事を起こす」ことをまさに体現している存在といえるでしょう。5月末にはWalSEC実行委員会も発足しました。Pre-WalSECの反省と3年間のシニアスタッフの経験を活かし、高校生の発想とエネルギーを活かした大会運営を行ってけると期待しています。

◆ WalSECについて

WalSEC (Waseda International Symposium on Education and Culture)を11月15日(木)～18日(日)に本学院を会場として開きます。大会概要は以下のとおりです。

大会テーマ:「アジア—人と人、人と自然の共生」
目的: ①全校で取り組む国際高校生学会の事例を提供する。②大会前、大会期間中、大会終了後の一連の学習プログラムを開発する。

ゲスト校: 海外8校、国内4校を招聘。各校から生徒3～4名参加。
プログラム: 14日(水、県民の日) 海外校来日(都心泊)、学院内準備日
15日(木) 海外校歓迎行事(3年生3限)、海外校LHRと授業体験(1年生4、5限)、国内校到着、開会式(6限)、文化交流、懇親会
16日(金) 基調講演、研究発表会(2年生5、6限)、ポスターセッション
17日(土) フィールドワーク、グループ別協働プロジェクト
18日(日) プロジェクト発表、閉会式
またとない貴重な経験となる事業です。学院生諸君の積極的な取り組みを期待します。

科学関連プログラム報告

(2017年12月～2018年4月)
(詳細は学院Webサイトを御覧ください)

1. Satit Prasarnmit Demonstration School (SPDS) との交流

12月16日～21日の日程で、タイの Satit Prasarnmit Demonstration School (SPDS) が本庄学院を訪問した。JSTのさくらサイエンス事業の一環として実施された。この学校はバンコクにある Srinakharinwirot University の附属高校である。Demonstration School とは、タイで大学の教育学部に附属し、カリキュラム開発や教材研究、教師育成を目的とする学校のことを指す。博物館・企業見学・早稲田大学見学・文化交流の他、タイと日本共通の伝統文化の再認識、継承と発展に寄与することを考え、「絹の伝統技術の継承発展」についてミニシンポジウムを実施した。パディとして協力して下さった多くの学院生にこの場を借りて感謝申し上げます。特に、全行程パディとして SPDS 生徒とともに行動し、レベルの高い成果発表をした3年大橋彩里・清水玲奈・荒川航輝さん、ありがとうございました。

2. Mahidol Science Fair 2018 (MSF) および Mahidol Wittayanusorn School (MWITS) との交流活動

1月25日(木)～1月31日(水)に生徒8名(2年井上絵理・福田渉・富木良・内田南、3年上野真琴・小川いぶき・秋庭杏香・上野ほのか)が MWITS を訪問し、科学交流・授業交流・文化交流を行ない、MWITS 生徒と交流を深めた。26日～27日に開催された、科学フェアに参加し、研究発表を行ない、物理部門で小川いぶき・上野ほのかが Best Idea 賞を受賞した。

4月18日～25日には MWITS が本庄学院を訪問した。授業参加・研究発表・文化交流・茶道部の Welcome お茶会の他、さいたま水族館・

日本絹の里・富岡製糸場見学、ヤマキ醸造・赤城乳業見学、東大キャンパスツアー・早稲田大学西早稲田キャンパスにおけるミニシンポジウム等多彩でタイトなスケジュールであった。多くの学院生がパディとして交流を深めた。特に、書道部による Welcome 書道パフォーマンスは特筆される。

3. 河川研究班の活動

* 川の日ワークショップ関東大会

3月17日に筑波大学にて開催された「川の日ワークショップ関東大会」において「小山川における小型河川エビの状況」というタイトルの研究発表を行ない、河川研究班(熊谷琴葉・秋庭杏香・小川いぶき・内藤里紗・新井律子・井上絵理)の活動が特別賞を受賞した。このシンポジウムは、関東における河川環境保護に携わる小学生から大人までが幅広く、その活動を報告し評価を得るものである。

* 本庄市民シンポジウム「川のシンポジウム2017」

3月10日(土)に本庄早稲田リサーチパークに於いて、標記シンポジウムを本庄学院・藤田小学校の主催で開催した。「小山川における外来エビ・在来エビの状況とその理由」「小山川におけるオスメスの分布とその理由」というテーマで河川研究班が研究成果を発表した。また、埼玉県環境科学国際センター金澤先生・木持先生がそれぞれ、「本庄市内のカダヤシの状況」「中国における河川環境教育」について報告を行った。高校と小学校が一般市民に向け、河川環境について啓蒙するシンポジウムを開催するということは全国的にも極めて稀な例である。

* 河川予備調査

今年度の河川研究班(3年内藤里紗・小川いぶき・秋庭杏香・熊谷琴葉・上野ほのか・中村華英、2年新井律子・井上絵理・小澤七菜・松本綾香・飯野七夏・内田南)の訓練と藤田小児童に教えるための予備知識習得のため、4月28日(土)、埼玉県環境科学国際センター金澤先生ご指導の元、小山川・元小山川で河川予備調査を行った。

4. 藤田小学校・旭小学校との連携活動

12月6日(水)「目の錯覚」をテーマに、講義と実験を行った。

12月12日(火)本庄市立旭小学校で「水質」をテーマに環境学習を行った。バックテストや水道水の塩素測定実験も行った。

1月31日(水)2月7日(水)「プレゼンテーションの名人になろう」をテーマに、プレゼンスキルの習得に取り組んだ。3月の市民シンポジウムでの発表に向け、エレベータープレゼンテーション・レディ・メイドプレゼンテーションにチャレンジした。



SPDS との交流(早稲田大学西早稲田キャンパスで)



タイの民族衣装を借りて MWITS の生徒と



藤田小での2017年度最後の授業



市民シンポジウムで藤田小の児童と



川の日ワークショップ関東大会



書道部による Welcome 書道パフォーマンス



4月28日河川予備調査

生徒達の活躍

◆陸上部

4/20～22に行われた埼玉県北部総体において、陸上部の選手が様々な種目に出場し、その多くが入賞、県大会に駒を進めました。また自己ベストの達成、新しい種目への挑戦など、それぞれに練習の成果を感じ取っていました。

今大会では3年生の上野真琴さんと足立涼子さんの2種目での優勝、県大会出場者も男子24名、女子15名と例年以上に女子の活躍が目立ちました。3年連続の全国インターハイ出場の期待も懸かる上野さんを始め、男女共にチーム一丸となって続く県大会(5/11～14)に臨みます。

男子入賞者
100m 4位 平野 颯人(2) 11"25
200m 4位 守谷 光永(3) 22"81
400m 5位 若林 樹(1) 52"17
7位 大畑 遼恭(3) 56"28
1500m 5位 浅香 俊輝(3) 4'12"34
5000m 8位 野口 文也(2) 16'30"00
4x100mR 3位 早大本庄(守谷 光永(3) 難波 拓斗(3) 柳澤 亮(3) 平野 颯人(2)) 43"26
4x400mR 2位 早大本庄(平野 颯人(2) 若林 樹(1) 赤坂 應介(2) 中島 実(2)) 3'26"19

走高跳 4位 田中 千李(2) 1m70
棒高跳 1位 遠藤 竜仁(3) 4m30
走幅跳 3位 堀切 王貴(2) 6m46
三段跳 5位 芥川 友哉(3) 12m69
八種競技 4位 神林 立 3900点
男子総合 3位 早大本庄(トラック3位フィールド4位)

女子入賞者
100m 2位 今西 奏乃(1) 12"75
200m 4位 今西 奏乃(1) 26"77
800m 8位 飯野 七夏(2) 2'30"72
100mH 1位 足立 涼子(3) 15"63
3位 落合 憂(3) 16"61

4x100mR 1位 早大本庄(上野 真琴(3) 今西 奏乃(1) 足立 涼子(2) 高野 葉(2)) 49"79
4x400mR 4位 早大本庄(飯野 七夏(2) 高橋 佑瑠(3) 高野 葉(2) 小林 香菜(2)) 4'19"29
走高跳 4位 高野 葉(2) 1m45
棒高跳 1位 高橋 佑瑠 2m60(大会新記録)
走幅跳 1位 上野 真琴(3) 5m47
8位 植木 千尋(2) 4m79
円盤投 7位 栗島 優都紀(2) 24m22
やり投 3位 木下 真緒(3) 35m10
七種競技 2位 木下 真緒(3) 3641点
女子総合 4位 早大本庄(トラック5位フィールド4位)



◆硬式テニス部(男子)

関東予選大会埼玉県北部地区予選(4月13日～16日、県大会出場分)
男子シングルス 4位 村松海斗、12位 原龍成、18位 北村 玲恩、19位 武越一樹、20位 武越力哉
男子ダブルス 7位 武越一・北村、10位 村松・武越力
女子シングルス 優勝 森川優希、準優勝 齊藤ひろ、3位 室伏奏旅、4位 山村明日美、5位 田中紗貴、6位 杉本沙弥
女子ダブルス 優勝 森川・室伏、準優勝 齊藤・田中、3位 山村・杉本

関東予選大会埼玉県大会(4月28日～30日)
男子シングルス 64 村松海斗
女子シングルス 16 森川優希、64 齊藤ひろ・山村明日美
女子ダブルス 32 森川・室伏、齊藤・田中
関東予選大会団体戦(5月12日～13日)
男子(村松・原・北村・武越・武越) 1回戦 1-2 越谷南
女子(森川・齊藤・室伏・山村・田中) 1回戦 3-0 大宮、
2回戦 2-0川越南、3回戦 2-1 埼玉平成
4回戦 0-2山村学園(D:齊藤・室伏0-6足立・佐久間、
S1:森川13-6星野、S2:山村(打ち切り)矢崎)
3位トーナメント1回戦1-2越谷南(D:室伏・山村6-2平川・内田、S1:森川15-7千歳、S2:齊藤6-7(7)鈴木)

◆ソフトテニス部(男子)

4月 県北選手権大会(個人戦)
ベスト8 宮下皓志(3 F)・小林太一(3 D)ペア
日野拓人(3 E)・小山修(3 A)ペア
ベスト32 儘田雄士(2 C)・中村颯斗(3 H)ペア
ベスト64 村上和樹(3 E)・大平真都(3 B)ペア
※北部・西部地区の新2・3年生による大会ですが、ベスト8に2ペアが入る活躍を見せました。

4月 関東大会 埼玉県北部地区予選(個人戦)
優勝 宮下・小林ペア
準優勝 儘田・玉貴陽都(1 E)ペア
ベスト8 村上・中村ペア
ベスト34 吉江隆一郎(1 D)・小山ペア

※学院生同士による決勝は初めてです。
4ペアが県予選会出場権を獲得しました。

5月 関東大会 埼玉県予選会
個人戦 ベスト8 儘田・玉貴ペア
ベスト20 宮下・小林ペア
※村上・中村ペアは64名、吉江・小山ペアは128名。
団体戦 ベスト8(2回戦2-1本庄、3回戦2-1鴻巣、4回戦2-0所沢、準々決勝1-2昌平)。

※個人戦では2ペアが6月1～3日に茨城県水戸市で開催される関東大会の出場権を獲得しました。宮下君は2年連続関東大会出場となります。関東大会2ペア同時出場、2年連続関東大会出場、県個人ベスト8は、いずれも学院男子初の快挙です。

一方、新人戦県ベスト8の結果により第5シードとして臨んだ団体戦は、3位以上(団体戦関東大会出場権獲得の3校入り)を目標に奮闘しましたが、惜しくも及びませんでした。



◆ソフトテニス部(女子)

4月 関東大会 埼玉県北部地区予選(個人戦)
ベスト8 飯塚優夏(3 H)・池本菜南子(3 H)ペア
※県予選会出場権獲得。
5月 関東大会 埼玉県予選会 個人戦64名 飯塚・池本ペア

◆硬式野球部

春季大会 北部地区予選
代表決定戦 4月14日(土)於上尾市民球場対小川高校
11-4(7回コールド)
※昨年度秋季県大会の戦績によって1回戦シードを獲得
県大会 2回戦 4月26日(木)於上尾市民球場
対上尾高校1-8(8回コールド)

◆サッカー部

新人戦県北大大会
準決勝 2/6(火) 早大本庄 2-0 熊谷
決勝 2/8(木) 早大本庄 1-6 成徳深谷
新人戦県大会 1回戦(ラウンド16) 2/10(土)
早大本庄 2-5 南 県ベスト16
関東大会埼玉県予選
1回戦 4/14(土) 早大本庄 2-0 南陵
2回戦(ラウンド16) 4/15(日)
早大本庄 1-2 埼玉栄 県ベスト16

◆ラグビー部

新人戦県北大大会
1回戦 12月17日(日) 早大本庄 26-5 松山
準決勝 12月24日(日) 熊谷 33-0 早大本庄
3位決定戦 1月7日(日) 早大本庄 45-5 合同
新人県大会
1回戦 1月14日(日) 昌平 40-5 早大本庄
関東大会県予選
1回戦 4月15日(日) 早大本庄 38-0 越谷南
2回戦 4月21日(土) 川越東 38-21 早大本庄
国体県大会北部予選
1回戦 4月28日(土) 早大本庄 52-12 本庄第一
準決勝 5月3日(木) 正智深谷 15-5 早大本庄
3位決定戦 5月6日(日) 早大本庄 21-0 松山
◆ラグビー部3現在、5月26日からの国体県大会で勝ち進み、秋の全国大会県予選のBシード獲得を目指して日々精進しています。引き続き応援のほど、よろしくお願ひ致します!! 1年生諸君、ラグビーは本場に素晴らしいスポーツです!!ラグビー部はいつでも入部OKですので、少しでも興味のある人は是非グラウンドへ見学に来て下さい!!

◆卓球部

埼玉県高等学校新人卓球大会北部支部予選会
2018年1月22日(月)～24日(水)
開催場所 くまがやドーム体育館
種目 男子シングルス第3位2年A組池田祐将
女子学校対抗 第7位 県大会出場
※ 女子の団体戦で県大会進出を果たしたのは共学化以来初めてのことで、まさに快挙です。

◆囲碁・将棋部

第54回高校将棋選手権埼玉大会
団体戦優勝1年近藤圭・3年尾崎優介・3年笠原大知
女子個人戦3位3年阿南美穂
男子個人戦4位3年尾崎優介

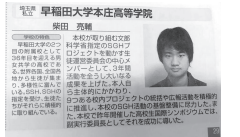
◆政治経済部

第18回(2017年度)日経STOCKリーグ 入選
今野雄太(3 B)・細井一希(3 F)・関智美(2 F):「障害者支援」をテーマに、技術開発と障害者雇用の両面から投資銘柄を選定し、企業訪問なども重ねて、現場のようすと声も反映したレポートを作成しました。その結果、高校部門での参加全960チーム中、上位35本に入選しました。

◆第20回「高校生新聞社賞」をSGHシニアスタッフの中心メンバーが受賞

2017年度卒業生の柴田亮輔さん(早大政経学部1年)が、SGHシニアスタッフとしての3年間の貢献を認められ、「高校生新聞社賞」を受賞しました。
高校生新聞社によると、この賞は平成10年度に創設され、「高校生活を通じた努力と成長を卒業時に表彰する高校生活3年間において学業、文化・スポーツ、生徒会・各種委員会、ボランティア、その他の活動のいずれかに自主性と行動力をもって挑戦し、大きく成長した生徒に対して、その栄誉を称える」賞です。第20回目の今回は全国740校2505名の高校生に賞が贈られ、「高校生新聞社賞」記念冊子「スタートライン」に掲載されています。

柴田さんは1年次からSGH神縄フィールドワーク、韓国ハナ高校国際シンポジウム、JICA論文コンテストに参加するだけでなく、SGHシニアスタッフの組織作りや広報活動、活動記録の後輩への伝達など、本学院SGHの生徒活動を活性化するため3年間貢献を続けました。受賞おめでとうございます。今後のますますのご活躍を期待しています。



【その他個人での活躍】

◆慶應義塾湘南藤沢高等部「論文実習オリエンテーション」で、3H市川実花さんが研究成果発表

早稲田大学本庄高等学院では、先輩の卒論への取り組みを後輩に伝えるとともに、論文指導の効果上げるため、以前より同じような取り組みをしている慶應義塾湘南藤沢高等部(以下SFCと略)とコラボレーションを行っています。本庄学院の卒論報告会にSFCの生徒1名、SFCで先輩が後輩へ論文への取り組みを伝える論文実習オリエンテーションに本庄学院の生徒1名の研究発表を行っています。今年度は、本庄学院代表として3H市川実花さんが卒論「本庄市内における川エビのオスメスの分布から考察する河川環境」の研究発表を報告するとともに、論文に取り組む姿勢についてアドバイスしました(他に補助の2名の2年生、教員教務1名指導教員1名が参加)。



◆2年A組 永嶋千春

2017年11月3・4日
第28回彩の国・埼玉ピアノコンクール
高校生の部 金賞 埼玉新聞社賞および彩の国・埼玉ピアノコンクール賞受賞